法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-05-27

21世紀型農業経営のモデル創出に関する研究： 乳文化産業の日欧比較

木村, 純子 / KIMURA, Junko

(雑誌名 / Journal or Publication Title)
科学研究費助成事業 研究成果報告書
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
5
(発行年 / Year)
2019-06-05

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｈ０５７１１

研究課題名（和文）21世紀型農業経営のモデル創出に関する研究―乳文化産業の日欧比較―

研究課題名（英文）Creating theoretical model of agricultural management in the 21st century: Comparative study of dairy industry in Japan and Europe

研究代表者
木村　純子（Kimura, Junko）

法政大学・経営学部・教授

研究者番号：００３４２２０４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　10,710,000円

研究成果の概要（和文）：酪農乳業文化が成熟したイタリアと発展途上の日本の事例から1)グローバル化競争における優位性はローカルな共同体の協働によって創出されること、および2)競争激化社会に適応する酪農乳業活動の社会的意義創出の階層的構造作りが必要であることを明らかにした。階層的構造とはマクロ階層はEUが指針を明示化することによって各主体が価値観を共有している。中間階層はイタリア地理的表示保護協会(AICIG)といった組織が登録生産者団体を取りまとめているので各生産者団体は地域の観光産業発展に貢献できるような地域ブランドを形成する。ミクロ階層はGIの各生産者が集団的アイデンティティを形成し不要な競争を回避している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は持続可能あるいは循環型社会という新たな価値観に注目し、農業経営はどのように変わっていかなければならないかについてヨーロッパと日本を比較することで明らかにした。具体的にはイタリアと日本という文化的に異なる国での乳文化産業、ことさら酪農とチーズの生産活動を取り上げインタビューやフィールドワークといった複数の手法を組み合わせた調査で収集したデータを分析・解釈し21世紀型農業経営モデルの構築を試みた。

研究成果の概要（英文）：Italy with matured dairy culture and Japan as developing one, this research found that 1) global competitive advantage could be created by the collaboration of local communities, and 2) it is necessary to form a structure in order to creating raison d'etre of dairy activities. In specific, at the macro level, in case or Italy, the EU shares the sense of values by clarifying the guidelines. At the meso level, organizations such as AREPO and AICIG organize producer groups. Each producer group forms place branding that can contribute to the development of the tourism industry in the region. At the micro level, each producer forms a collective identity and eliminates unnecessary competition.

研究分野：マーケティング

キーワード：チーズ　農業経営　酪農　地域活性化　農村振興　原産地呼称保護制度

１．研究開始当初の背景

農業経済学および経営学研究分野で、近代産業社会における循環型農業経営は、さまざまな生産と消費の現象の説明に転換を求める鍵概念として多くの学術的注目を浴びてきた。近代産業社会(20 世紀型)の農業経営は、ケインズ経済学の有効需要の創出による経済的活性化の実現の論理を農業経営に適用し生産拡大を目指そうとするものであった。たしかに農業の工業化、すなわち生産の集約化によって近代農学は生産拡大に貢献し、消費面においても農業の工業化は食の大量消費を可能とし人々の欲望を満たしてきた。

さまざまな視座を用いた研究があるものの、新たな農業経営モデルの創出ならびにその機能と役割の解明は未だ発展途上である。本研究はこの潮流の更なる発展を目指し、21 世紀型農業経営モデルが多様な生産および消費文脈の中でいかなる役割を演じるのかを考えることにした。具体的には、農業経営は地域の価値連鎖と深く結びついているという既存研究の主張にならい、地域特定的な文化を活用した産業活動が、結果としていかなる価値を生み出すのかについて、生産地と生産物との関係性や地域との連携というコンテクストの中で考察した。

２．研究の目的

本研究は、持続可能あるいは循環型社会という新たな価値観に注目し、それが農業経営にいかなる変更を要請するのかについて、国際比較という視点から、環境、生産、消費との関わりの中で探索的に明らかにすることを目的としている。具体的には、欧州と日本という文化的に異なる国での乳文化産業に焦点を当て、歴史分析ならびにインタビューやフィールドワークといった異なる複数の手法を組み合わせたアプローチにより収集された、多様なデータの分析・解釈を通じて明らかにすることを目指した。異なる国における文化的差異に注目することにより、21 世紀型農業経営モデルの構築を試みた。

本研究の理論的な位置づけは以下のようになる。すなわち、持続可能な社会の概念が農業経営にいかなる影響を与えるかという研究潮流の発展を促進し、同時にそこに経済価値のみならず社会価値という視点、および国際比較という視点を盛り込むことで、農業経営論とマーケティング論に関する研究、ならびに国際比較研究の接合を試みるものである。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するためには、大きく二つのステップをとる。第一ステップでは、研究目的に沿った調査仮説を導出するための研究活動を行う。第二ステップでは、導出された調査仮説を検証するための研究活動を行う。具体的には、前者では(1)関連分野における既存研究を広く精査する文献調査を科研採択期間を通じて実施し、(2)農業経営者、農業経営を支援するEU、国、自治体、関連機関に対するインタビュー調査、(3)日欧における実際の酪農や乳関連製品の生産と消費シーンにおける経験・観察調査を、2016 年 7 月にイタリアのドロミテ山岳地域、2017 年 2 月にイタリアのサルデーニャ島で、2018 年 1 月にイタリアのプーリア州で、2019 年 1 月にイタリアのモリーゼ州とカンパーニャ州で、2018 年 5 月に北海道帯広で実施した。

収集された経験データについては、内容分析やテキストマイニング等の解釈手法などを通じて、仮説導出に必要な情報を選別した。後者では(1)第一ステップを補足する文化人類学・人文地理学的な追加的調査、(2)小規模サンプルによるデプス・インタビュー、(3)デプス・インタビュー結果に基づき収集した消費者アンケート調査を利用した共分散構造分析という計量手法、(4)乳文化形成の生業・牧畜・生態・地勢・歴史分析を行うことで仮説を検証した。

４．研究成果

【具体的内容】2016 年 7 月にイタリアのドロミテ山岳地域における乳文化の調査、および 2017 年 2 月にイタリアのサルデーニャ島の山間部における乳文化の調査を実施した。ドロミテ山岳地域での熟成チーズの小規模製造は、季節的に上下移動する移牧という生業形態、長い冬期という自然環境に適応した形態を示していた。できるだけ多くの熟成チーズを夏期に自ら製造し、年間の自家消費に用い、外部接触者(訪問者・観光客)に販売するという生産・生業形態は、地域の価値連鎖と深く結びついて発達していた。サルデーニャ島での熟成チーズの小規模製造は、季節的に上下移動する移牧という生業形態、夏温暖・冬寒冷という自然環境、農耕民社会との接触に適応した形態を示していた。低地滞在中には新鮮・熟成チーズを農耕民に売却し、高地での本村滞在中には熟成チーズを保存・熟成し、自らの生活に用いるという生産・生業形態は、地域の価値連鎖と深く結びついて発達していた。北海道帯広での熟成チーズの小規模製造は、1980 年代の生乳生産調整をきっかけに開始された場合が多く、歴史がまだ浅く、定住型集約酪農の特徴を活かしきれておらず、新鮮・熟成チーズを製造することの意義が不明確である傾向にあった。新鮮・熟成チーズを利用する地域の消費者側も、新鮮・熟成チーズを日常生活に利用するという食文化形成が未発達の状況にあった。これは、日本における乳文化が地域に不可欠な生産物として発達してこなかったことと深く関係しており、乳文化が地域の価値連鎖と結びつくにはいまだ時間を要するものと考えられた。

加えて、日本国内の調査として、生活者の牧場体験が乳製品への態度(好き嫌い)、そして乳製品に対する購買意図にどういう影響を及ぼすかを、デプス・インタビューで仮説をたて、それに基づくアンケート結果から共分散構造分析を実施し、牧場体験が大人であってもプラスの影響を及ぼすことを検証した。

【意義】乳文化がすでに浸透しているイタリアにおける北イタリアの山岳地帯と紀元前 13 世紀のフィニキア文化が残された島サルデーニャという異なるコンテクストにおいて循環型社会のあり方の手がかりを得た。それらは正に、地域の価値連鎖と深く結びついており、その生産地と生産物との関係性の在り方は地域の生態環境・社会環境が大きく規定していた。

加えて、日本国内の調査によって、持続可能な酪農業を行う場合、牧場体験が酪農者と消費者の関係性を強化し、酪農生産物の需要を高め、サステイナブルな仕組みに貢献することを明らかにした。

【重要性】持続可能な社会の概念が農業経営にいかなる影響を与えるかという研究潮流の発展を促進するための鍵概念を導出し、21 世紀型農業経営モデルが多様な生産および消費文脈の中でいかなる役割を演じるのかを明らかにした。

実践的インプリケーションとして、国内の調査による検証で酪農業の場合には牧場体験を通じて、酪農業維持に貢献する需要拡大の刺激となることがわかったが、このことは一般的な農業においても同様であると考えられ、フードツーリズムなどが刺激の候補に挙げられよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 15 件）

① Hirata, Masahiro. Yamada, Isamu. (近刊) “Milk culture in Slovenia in the Western Part of the Balkan Peninsula,” Milk Science, 69(1),査読有.

②木村純子(近刊)「地理的表示(GI)と持続可能な開発目標(SDGs)：テロワールに根ざした農業の貢献」『フードシステム研究』査読有.

③上田隆穂・山中寛子・竹内俊子(近刊)「消費者の牧場体験が酪農家および乳製品への態度及び購買意図に与える影響の調査」『学習院大学経済論集』56(1・2), 査読無.

④平田昌弘 (2019)「生乳と乳製品、肉、麦類で厳寒の冬を生き抜く－ヤクと生きる、チベット牧畜民の食生活」『デーリィマン』69(2), p52-55, 査読無.

⑤上田隆穂・竹内俊子・山中寛子(2019)「日系食品企業のセミ・グローバリゼーション戦略～Web 調査による仮説探索と江崎グリコ株式会社インタビューによる探索仮説の議論～」『学習院大学経済論集』55(4), p111-153, 査読無.

⑥上田隆穂(2019)「地方美術館を核とした地域活性化研究」『学習院大学経済経営研究所年報』32, p1～31, 査読無.

⑦木村純子(2019)「地理的表示(GI)と持続可能な開発目標(SDGs)」『日本マーケティング学会ワーキングペーパー』15(4), p1-16, 査読無.

⑧ Hirata, Masahiro. (2018) “Milk Processing System in Rwanda,” Milk Science, 68(3), p175-185, 査読有.

⑨ Hirata, Masahiro., Kimura, Junko., Ueda, Takaho. and Barattin, Tanja. (2018) “Milk Processing System in Barbasia of Sardinia (Italy) located in Mediterranean Area,” Milk Science, 68(2), p65-79, 査読有.

⑩ Hirata, Masahiro. Ogawa, Ryunosuke., Gebremedhin, Birhane Gebreanenia., Takenaka, Koichi. (2018) “The recent decrease in the number of livestock and its cause for the agri-pastoralists in the Ethiopian highland- From the cases in southern Kilite Awlaelo district in eastern Tigray region,” Journal of Arid Land Studies,28(1),2018, p1～15, 査読有.

⑪平田昌弘(2018)「市場経済化と共に乳製品が再び勢い取り戻す－変わりゆく内モンゴルの食文化と牧畜民」『デーリィマン』68(11), p58-61, 査読無.

⑫上田隆穂(2018)「地域産品のマーケティング」『電気のふるさと』52, p14, 査読無.

⑬上田隆穂(2018)「安売りせずに売るにはどうすればよいか？」『プレジデント』9 月 17 日号,116-117, 査読無.

⑭ Zolin, Maria Bruna., Mazzarolo, Martina., Kimura, Junko. (2018) “EU-Japan EPA a Stumbling Block or a Stepping Stone toward Multilateralism for Food and Beverages,” Journal Global Policy and Governance,7(2), p13-32, 査読有.

⑮ Defrancesco, Edi. & Kimura, Junko. (2018) "Are Geographical Indications (GIs) Effective Value-adding Tools for Traditional Food? Insights from the new-born Japanese GIs System," Proceedings in System Dynamics and Innovation in Food Networks, p119-130, 査読有.

〔学会発表〕（計 11 件）
①平田昌弘(2019)「牧畜・乳文化から日本中山間地の活性化を考える」『日本学術会議食料科学委員会畜産分科会・日本草地学会共催公開シンポジウム〈放牧・酪農による中山間地活性化の可能性を探る〉』広島大学,2019 年 3 月 25 日.

②上田隆穂(2019)「一次産業を念頭に置いた地域活性化の考え方」『日本学術会議食料科学委員会畜産分科会・日本草地学会共催公開シンポジウム〈放牧・酪農による中山間地活性化の可能性を探る〉』広島大学,2019 年 3 月 25 日.

③木村純子(2019)「酪農の SDGs への貢献」2019 年度日本草地学会広島大会『日本学術会議食料科学委員会畜産分科会・日本草地学会公開シンポジウム〈放牧・酪農による中山間地活性化の可能性を探る〉』広島大学,2019 年 3 月 25 日.

④ Hirata, Masahiro. (2019) "Characteristics of Milk Culture in Bulgaria from the World's milk cultural perspective," International Conference of Pastoralism: Traditions and Modernity -Anthropological, Ecological and Social Aspects, 25-26 February 2019, Sofia.

⑤ Kimura, Junko. (2018) "Effects of Geographical Indication (GI) registration under EU-Japan EPA," invited speech at Master Food Identity ESA (Ecole Supérieure d'Agricultures) in Angers, France, October 11, 2018.

⑥木村純子(2018)「地理的表示(GI)の登録効果と価値創出」『中央大学経済研究所・企業研究所公開研究会』2018 年 9 月 10 日.

⑦木村純子(2018)「近未来の農産品マーケティング」法政大学イノベーションマネジメント研究センター主催 国際シンポジウム『近未来のマーケティング戦略：「デジタル破壊」の時代に何が起きるか』2018 年 6 月 15 日.

⑧上田隆穂・山中寛子・大沼善朗(2018)「未来の棚のデザインに関する一考察」日本商業学会, 2018 年 5 月 27 日.

⑨上田隆穂(2018)「基調講演：日系食品企業のセミ・グローバリゼーション戦略～Web 調査と企業インタビュー調査を基に～」日本商業学会, 2018 年 5 月 26 日.

⑩ Kimura, Junko. (2018) "Making Business in Japan in Agrifood Sector: Opportunities for European Collaborations for Certified Products," EU-Asia Gateway 2018, The 4th Transylvanian International Clusters Conference in Cluj-Napoca, Transylvania, Romania, May 17, 2018.

⑪平田昌弘(2018)「辞典への新たな視点①事典をも内包した新しい文化辞典の試み－アムド系チベット牧畜民の乳文化の事例から－」『チベット牧畜文化辞典パイロット版公開記念ワークショップ・チベット牧畜文化辞典の未来を語る』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究センター,2018 年 3 月 28 日.

〔図書〕（計 4 件）
①平田昌弘(2018)「乳の利用と歴史」玖村朗人・若松純一・八田一編著『乳肉卵の機能と科学』アイ・ケイコーポレーション,2-6 頁,総頁目 337 頁(共著).

②平田昌弘(2018)「ユーラシア乾燥地帯での牧畜民にとっての生態資源とその変貌―乳加工技術を中心として―」山田勇・赤嶺純・平田昌弘編著『生態資源－モノ・場・ヒトを生かす世界』昭和堂,205-230 頁,総頁数 277 頁(共著).

③平田昌弘(2018)「アラブの牧畜民ベドウィンの羊と共にある暮らし」本出ますみ編著『羊の本』スピナッツ出版,260-265 頁(共著).

④平田昌弘(2018)「生態環境が育む北アジア牧畜の特徴―西アジア牧畜との対比から―」高倉浩樹編著・『寒冷アジアの文化生態史』東北大学出版会,2-114 頁,総頁目 120 頁(共著).

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織
(1)研究分担者

研究分担者氏名：上田 隆穂

ローマ字氏名：UEDA, Takaho

所属研究機関名：学習院大学

部局名：経済学部

職名：教授
研究者番号（8 桁）：40176590

研究分担者氏名：平田 昌弘

ローマ字氏名：HIRATA, Masahiro

所属研究機関名：帯広畜産大学

部局名：畜産学部

職名：教授
研究者番号（8 桁）：30396337

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。